

流行に則ったものとなっている。

メディアの発達した今日、そもそも寄席の中で演じられていた漫才と落語もかなり早い時期に寄席の場を飛び出し、テレビや映画に登場するようになってきている。そこで漫才師たちは限られた番組の時間内に笑いの技を發揮し、多くの観衆を惹きつけている。

寄席の芸は、伝承の面において問題に直面している。第一に、寄席の数そのものに限りがあるために、落語家たちの演出空間は制限され、演じる時間も短縮を迫られている。第二に、師弟関係の変化により、対面式の稽古でしか学ぶことができない技が失われており、練習の不十分さを招いている。第三に、若者世代が伝統芸能に注目しなくなったことで、寄席の観衆の高齢化が進んでいる。若者の多くは落語の典拠を理解せず、このことが同時に漫才のファストフード化を生み出している。最後に、メディアにとって、寄席芸能はもはや利用するための手段でしかなく、保護する対象とはみなされていない。

現代日本の都市において、漫才は若者たちの間で最も流行し、一方の落語はお年寄りに歓迎されている。基本

的に落語とは異なる伝統を保ち続けてきた漫才は、現在では完全に大衆文化の生産・流通過程の中に埋め込まれており、技を口伝で伝承してゆくという伝統的なパターンから離脱している。こうして、漫才の生産パターンは演劇のそれと同じになり、書かれた脚本が主導している。そのために、漫才もまた、重複性や間テクスト性 (intertextuality) といった口承伝統の伝承がもつ特質を具えることはなくなり、大衆娯楽がもつ新鮮さやオリジナリティがそれにとって代わることになった。

現代社会に入ってから、そもそもはリトル・コミュニティにおいて息づいていた寄席芸術が歩んできた方向性は、考えるべき問題を多々含んでいるのである。

註

- 1) 本文では、現代において漫才と落語を維持させ続けている仕組み (吉本興業やメディア) についても注目する。
- 2) Robert Redfield, *The Little Community and Peasant Society and Culture*, University of Chicago

## 日本のお守りの魅力

Josef Antonius Kyburz

(フランス国立高等研究院東アジア文明研究センター)



神奈川大学の非文字資料研究センターで、同センターとフランス国立高等研究院東アジア文明研究センター (CRCAO) の交流プログラムの一環として、3週間にわたって研究を行う機会に恵まれた。本当に魅力的な3週間だった。

今回の訪日は、私が続けている日本の「お守り」に関する研究をさらに進めることが目的であり、それだけに一層魅力的であった。日本には数多くのお守りがあり、横浜や六角橋周辺でもよく見かけるが、私が研究の対象にしているのは紙に印刷されたお守り、つまり、人々がお寺や神社からもらう厄除けや護符で、その形状から、通常「おふだ」と呼ばれているものである。学術研究のテーマとして「おふだ」を取り上げるというのは、海外でも日本でも、やや風変わりであることは明らかである。

確かに、テーマとしては変わっている。というのは、「おふだ」は日本人が学術研究の対象として思いつくようなものではないし、より正確に言えば、日本人はごく最近

までそうは考えていなかったからである。したがって、最初にそう考えたのが、外国人、すなわち西洋からの訪問者や日本文化の観察者であったとしても、意外なことではない。

日本の「おふだ」について最初に西洋に伝えたのは16世紀後半のキリスト教の宣教師たちで、彼らはそれを普遍的な存在として「免罪符」と呼んだ。長崎の出島にあった東インド会社商館付のドイツ人医師、エンゲルベルト・ケンペル (1651～1716年) は、「おふだ」とそれに関連した風習や民間伝承についてかなり詳しい説明を残している。1727年に出版されたケンペルの『日本誌』には、何枚かの「おふだ」の説明図が含まれているが、その中で最も目立つのは、ケンペルが自分で描いた、平安時代の高僧で元三大師と呼ばれた良源 (912～985年) の姿である。こうした昔の図的表現が存在することによって、ケンペルが日本に滞在した1691～1692年当時から300年以上にわたってその図像が少し



も変わっていないという事実を我々は証明できるわけで、その意味でこの図像は一層注目値する。というのも、関東地方の少なくとも3つの主要な寺院、すなわち、調布の深大寺、上野の寛永寺、および川越の喜多院が、今日に至るまでこの黒い角を持つ良源を描いた厄除けのお守りを大量に発行し続けており、角のある姿に身を変えた良源は「角(つ)の大師」の名でよく知られているからである。関西地方でも、災いから一家を守るため、この鬼に似た図像が家の入口の戸に貼り付けられているのが、現在でも人目を引く。

ケンペルは、通訳からこうした紙のお守りについて説明を受けたと思われるが、言うまでもなく、それらを間近で見ることのできる立場になかった。それから約200年が経過すると、外国人を取り巻く状況も変わり、当時、東京帝国大学の日本語学教授だったバシル・ホール・チェンバレン(1850～1935年)は、ラフカディオ・ハーンの助けを借りて、大量の「おふだ」を収集した。友人でアニミズムと呪術思想の研究で有名な人類学者、エドワード・タイラー(1832～1917年)の要請によるものだった。これらの800点余りの様々な日本の「おふだ」は、オックスフォード大学のピットリバーズ博物館に収蔵されている。

それから数十年後、フランスの古人類学者、アンドレ・ルロワグーラン(1911～1986年)は、日本の文部省からの奨学金で京都に滞在していた1937年から1938年にかけて、骨董品店やがらくた屋から大量の日本の神々の図像を収集し、その代表的なサンプルを抽出してまとめようと考えた。このコレクションは、もともとはパリの人類博物館に展示されることになっていたが、現在は、スイスのジュネーブ民俗学博物館に、ほぼ同規模のものが収められている。

第3の大規模な「おふだ」のコレクションは、現在、パリのコレージュ・ド・フランスにある。ベルナル・フランク(1927～1996年)が収集したもので、その数は約1,000点に上る。フランクのコレクションの特徴は、それが日本の仏教の神々の全体像を表現するため、系統的に整理されていることである。フランクは、コレージュ・ド・フランスで日本仏教の図像学について教えていたが、日本仏教の神々の3次元表示は、当時すでにギメ東洋美術館に存在していた。すなわち、同美術館の創設者であるエミール・ギメ(1836～1918年)が1876年に日本から持ち帰った約400体の彫像である。そのため、フランクは紙のお守りに描かれた神々の2次元図

像で構成する自分のコレクションを構築し、それをギメのコレクションに匹敵するものにしようと考えたのである。フランクは、愛情も持って収集した「おふだ」を体系的に研究するつもりだったが、早世したため実現しなかった。

このフランク・コレクションの体系的な研究が、我々の研究チームの何人かの学者が取り組んでいる目標である。我々はこれまでに3回、このコレクションの一般公開の実現に成功した。具体的には、2006年9月～10月の町田市立博物館、2010年5月のアルザス地方の都市コルマル、および2011年5月～9月のパリ・フランス国立ギメ東洋美術館における一般公開である。

とはいえ、多くの研究が今後さらに必要である。我々の研究の第一歩は、この1,000点の「おふだ」を分類しその目録を作成すること、そしてそれを一般の人々がアクセスできる2カ国語のデータベース(<http://ofuda.crcao.fr/>)としてまとめることであった。しかし、最も重要な作業は、それぞれの図像を個別に検討し、発行元の寺、刻印、関連する特定の宗教集団や信仰、目的、地域の歴史などに関する入手可能なあらゆる情報をデータベースに入力することである。

日本仏教で崇拝の対象となり、フランク・コレクションの1つまたは複数の「おふだ」に登場する合計86人の宗教上の人物の多くは、その信仰全体についての研究がまだ行われておらず、地域によってどのような変種があるかについての研究はさらに少ない。そうしたことを調査するのが、今回の私の3週間にわたる非文字資料研究センターでの研究活動の目的であった。その結果—これは少なくとも関東地方に関する限りのことだが—鬼子母神信仰についてはその主要な礼拝場所(雑司ヶ谷の法明寺、中山の法華経寺、大塚の豪徳寺)における全体像が得られたほか、摩利支天信仰(下谷の徳大寺、高輪の泉岳寺)、前述の元三大師信仰(調布の深大寺、上野の寛永寺、川越の喜多院)、および七福神信仰の巡礼場所のいくつかについても全体像が明らかになった。これらの寺院の僧侶や職員の皆さんが口頭で説明してくれたそれぞれの場所の特定の信仰に関する貴重な情報に加えて、現場で個人的に観察したことや、あちこちで可能な限り集めた書き物の類も、我々のデータベースの完成に大きく貢献すると思う。そして、その恩恵を皆さんはフランス語と日本語で享受することができるだろう。